

資料 1 第二回討議内容まとめ

議論いただきたい論点

	現状		あるべき姿
人材育成・確保	クローズ（囲い込み）	→	オープン
	均質	→	多様性
	固定的な労働市場	→	流動的な労働市場
	安い賃金	→	質に見合う賃金
	働きやすさ	→	+ 社会的意義、豊かな暮らし
SDGs	社会的責任	→	ビジネス上の強み
	コスト	→	利益の源泉となる投資
	CO2多排出ものづくり県	→	CO2削減貢献県
	カーボン製品製造拠点	→	カーボンサイクル拠点
	個社での対応	→	企業会・地域での共創

前回までにいただいたご意見等要旨（技術人材育成・確保）

方向性	委員からのご意見等
オープン・多様性・流動的な労働市場	<ul style="list-style-type: none"> ・ Z世代が非常に気にするのはジェンダー、ダイバーシティ。アンコンシャスバイアス研修等に取り組み、魅力的な受け皿にすべき。 ・ 理系女子、STEM女子、このパーセンテージの引き上げが必要。このため幼少期からの理系体験の施策も議論したい。 ・ 今あるアセットに学生が気づき、知ってもらうためには、大学や高校、専門学校等の先生方が、普段から企業と交流する場があり、距離が縮まっていることが課題。 ・ 若い技術者には、スタートアップとの融合の中で、自分たちの技術が社会に通用し、役立つと感じさせることが大事。 ・ 仕組みを作る側であるイノベーションを巻き起こす人材は、地方の生産現場には少ない。製造視点ではない社会視点が必要だが、中小企業は技術の先にある未来や社会が学生に伝わっていない。このため、長期インターンシップで、学生に経営に触れる機会を与え、仕組みを作る側の仕事をさせること。若手の社員も感化され、内発的なイノベーションも生まれるなど、色々な未来が開ける。
社会的意義、豊かな暮らし	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2030年、50年に向けて、すばらしい未来を示して、人材を確保することが必要。 ・ この大分で働いてもらうためには、大分の魅力を示していくことが重要。 ・ 学生は、どのようなパーパス、ビジョンを描いている会社で、具体的にどのようなアクションをしているのかをシビアに見ている。 ・ エンジニアを奮い立たせる大きな要因は、経営層が部下の仕事を理解、評価し、良ければ表彰するプロセスを重視すること。
求められる人材像	<ul style="list-style-type: none"> ・ 技術の周りを支え、周りから踏み込んでいく人材。理系と文系が融合し、課題解決や問題を見極める力を作る。 ・ ビジョンを描く力、コンセプトメイキングができる力に、STEAMの力、理系の力が備わっている人材が次世代に重要。 ・ 個々の技術的課題に経済的などの様々な要因を加味し、学問と産業を結び付ける幅広い視野を持った人材育成が大事。 ・ 分野横断的な学びが大切。省エネや温暖化など様々な課題をP B Lの学びとして子どもたちに解いてもらうことができる。 ・ デジタルを作る、使う、横展開する人材の絶対数が不足。大学や高専との連携が必要。 ・ 創造型人材、実験室レベルから工業化に発展させる人材、市場を切り開く人材を区別した議論が必要。 <p>それぞれ異なる役割を持つ。特に半導体向けの方向性では、工場の技術者を大学・高専と教育プログラムを組み養成すること、研究開発センターとして進むことを検討してはどうか。</p>

前回までにいただいたご意見等要旨（持続可能な社会に向けた挑戦）

方向性	委員からのご意見等
ビジネス上の強み	<ul style="list-style-type: none"> ・ 大分の優位性はコンビナート。例えば、水素を発生させる企業と使用する企業のバランスをとり、役割分担して取り組むことも可能。一企業だけでは実行できない取組もコンビナートを連携して、効率的に展開できる可能性がある。 ・ 石油をエネルギーや原材料にして企業間を結び合わせ、一つの大産業を作り出す産業モデルから、これからの時代は、ホワイト水素で全体を繋げてコンビナートの強みを打ち出していくようなことが大事。 ・ SDGsは経営の意思そのもの。社長が代わっても持ち回れる課題感、将来の会社の一つの重要なポートフォリオを、リーダーシップを発揮して築いていく、という考えを持たないと、本当の意味での実践・実行はなしえない。
利益の源泉となる投資	<ul style="list-style-type: none"> ・ SDGsやESG絡みの取組がなければ、グローバルマーケットから資金を調達して、大分に投資することができなくなる可能性が高い。 ・ 生産拠点の多い大分だからこそ、仕組みを作る側の技術と仕組みを回す側の技術を一緒に進め、カーボンニュートラルを目指し、新たな仕組みはスタートアップの力を借りながら進めるような施策が必要。事業を創出できるような企業主体のファンドもあるとよい。 ・ 個社でできない部分の橋渡しは、新たな未来を見て育てる直接金融の仕事。例えばベンチャーキャピタルや上場企業でもCVCといった新たな会社の一つの柱を作ることになる。
CO2削減貢献県 カーボンサイクル拠点	<ul style="list-style-type: none"> ・ CO2を一方的に工場側に責任を課すだけでなく、使う側でSDGsに直結した動きをすると、魅力ある先進都市として映る。 ・ あるべき姿を明確に打ち出し、県内の力で埋められなければ、県外、あるいは海外の力を借りる。そのためには未来都市に選定されるといった発信が必要。SDGsに先進的な大分県になれば、様々なチャンスが訪れる。 ・ 日本が成長し、国力を保つには、エネルギーミックスが非常に大切。難しい方程式を解くような作業だが、学生に論理性のある方程式で解を目指すような教育を大学で取り組んでほしい。 ・ CO2削減には、省エネがまず重要。カーボンニュートラルに関連した技術開発動向の把握は、企業会や県の役割。 ・ 水素は、大分県に発展要素が期待される。宇宙港等をにらみ、水素基地の可能性もあり、これを足掛かりに発展策を検討しては。 ・ 将来の姿でビジョンを描くに当たっては、地域の中でものづくりが占める地位を考え、心に響くキャッチを工夫したい。
企業会・地域での共創	<ul style="list-style-type: none"> ・ コンビナート間は合理化・効率化を目的に上手く連携。カーボンニュートラル視点では、実証化に向けて、まずはホワイト水素等を少量でも連携して使うことが大事な要素になる。 ・ 単独で電力証書を買っている企業を集め、再生可能エネルギーから電力を作り、エコシステムにより回すことも大事。 ・ 大分県をリードする大手企業が、持続可能な社会に向けて率先的に取り組むことによって、地場企業も歩調を合わせ機運が高まる。 ・ SDGsは取りこぼしなく、どの企業も一緒に進んでいくと同時に、よい成果は注目し、ピックアップするシステムを作ってほしい。 ・ カーボンニュートラルには2つの大きな方向性。大規模では、実用化ステージの水素ステーションを早めに建設することが得策。小規模では、地域内連携プロジェクトチームで数多くの実績を早く重ねることが肝要。 ・ SDGsが掲げるあるべき社会に向け、経済合理性を生み出す強い意思と、期待値にあった企業価値を上げ、業を産み育てようとする人たちと接点を持つため、県や各団体、各企業は巻き込んでいく力、魅力を伝える力が求められる。